

平成26年度 重要文化財公開

首里城京の内跡出土品展

く甦る、異国からの宝物く



開催期間：7月18日（金）～11月3日（月）
期間中展示替えをいたします

沖縄県立埋蔵文化財センター

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| ごあいさつ | 1 |
| 首里城「京の内」とは | 2 |
| ～甦る、異国からの宝物～展示概要 | 3 |
| 発掘された京の内 | 4 |
| 中国のやきもの | 6 |
| 日本のやきもの | 9 |
| 東南アジアのやきもの | 10 |
| 多種多様な金工品 | 11 |
| 火災の痕跡からみえたもの | 13 |
| 首里城京の内関連年表 | 14 |
| 重要文化財指定基準 / 重要文化財指定の名称と指定理由 | 15 |
| 重要文化財首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧 | 16 |

【凡例】

1. 本図録は、重要文化財公開『首里城京の内跡出土品展～甦る、異国からの宝物～』（開催期間2014[平成26]年7月18日から11月3日）の展示を補完するものとして編集・作成したものである。
2. 企画および図録原稿執筆は、金城貴子・具志堅清大・新垣力・仲座久宜が担当した。
3. 掲載写真の撮影は矢舟章浩、鳥袋久美子が行った。また、現場写真は当時の担当者が撮影を行った。本図録に掲載されている写真・図面等の無断使用は固く禁ずる。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本図録に記載されている資料名が一部異なるものが存在する。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものである。

ごあいさつ

重要文化財「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 附一、金属製品 一、ガラス玉」は、首里城跡京の内地区から一括して出土したものであります。

14世紀中頃～15世紀中頃の中国、東南アジア、日本で生産された陶磁器類の優品518点と鉄及び青銅品一括で、我が国の歴史上意義深く、かつ学術的にも価値の高いものとして国の重要文化財（考古資料）指定を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて適切な保管・管理を行っています。

さて、当センターでは、平成15年度から毎年度企画展「重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展」として、多くの県民に公開しています。今回は、7月中旬から11月初旬までの約4か月間の開催を予定しており、ぜひ多くの皆様にご観覧いただきたいと考えています。

首里城京の内跡の発掘調査は、国営沖縄記念公園首里城地区復元整備事業に伴う遺構確認調査として、平成6～9年度まで実施されました。

今回の企画展では、首里城京の内跡の発掘調査によって見つかった資料の中でも、平成6年度に実施された発掘調査によって発見された倉庫跡（1459年の火災で焼失）と考えられる遺構から出土した遺物に焦点をあてます。

「霊力のある聖域」という意味をもつ京の内は、琉球国王の即位式などの王府の特別な儀礼や祭祀などを催す祭場であり、一括出土したこれらの陶磁器は、その催しなどに供されたと考えられる貴重な品々です。

異国からの宝物が、今甦ります。

重要文化財「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 附一、金属製品 一、ガラス玉」に対する皆様のご理解が深まるだけでなく、大交易時代で栄えた琉球王国の王城としての「首里城」の再発見の機会となり、さらに、本県文化財の魅力や価値に興味を持つきっかけともなれば幸いです。

平成26年7月18日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 下地 英輝

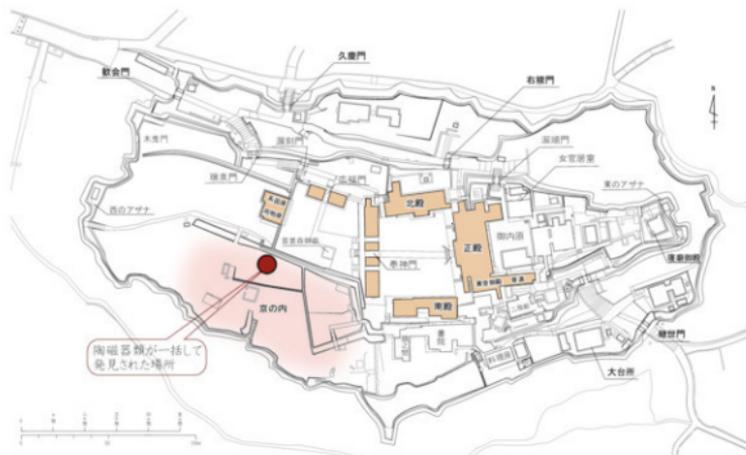
首里城「京の内」とは

首里城内は、^{まつりごと}政事を司る正殿一带と、国王のプライベート空間である御内原、そして聖域としての空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約5,000㎡の区画を指します。

琉球王国の正史、『^{ちゆうぐんせいし}中山世鑑』に記されている琉球の創世神話によると、天上に住む天帝が琉球の創世神アマミクに指示し、^{あすひい}国頭は辺戸の安須森から最良の聖地を求めながら南下しつつ、^{ちなんひい}今帰仁カナヒャブ、^{せいよあだけ}知念森、^{やぶさ}斎場嶽、^{あすひい}藪薩の浦原、^{あすひい}玉城アマツツ、^{あすひい}久高コバウ森を巡り、そして^{しゆりおい}首里城の^{ままだまひい}首里森グスク、^{ままだまひい}真玉森グスクの御嶽を創設するとともに、琉球の島々をつくらせます。この京の内は、アマミクが最後に降り立った場所とされ、琉球最高の聖域として認められた場所なのです。そのため、京の内の「京」は、^{にようん}霊力（セジ・シジ）と同義とされています。歴代の国王は、この最適の地に造った首里城を行政と祭祀の中心としました。

王府の神女・女官関係の文書がまとめられた『^{にようん}女官御双紙』には、首里城内に10箇所の御嶽があるとされています。これらは城内の東西南北、南東、南西、北東、北西のほか、上下に配置されており、ありとあらゆる方向の守りとしたことが考えられています。これらの御嶽において、祭祀を司る多くの神女たちは、その霊力により国王が未永く優れた存在として長寿が得られるよう祈りました。この様子は、『おもろさうし』の中でうたわれています。

このような背景から、首里城の中でも特別な空間であった京の内跡から出土した遺物の数々は、城内で執り行われた祭祀に用いられた可能性を示しているのです。

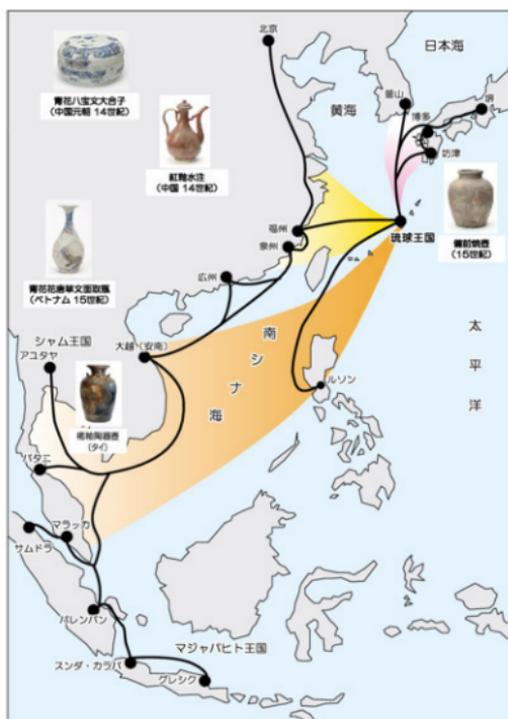


首里城平面図

～甦る、異国からの宝物～展示概要

今回の企画展で展示する資料は、首里城京の内跡の発掘調査によって見つかった資料の中でも、平成6年度に実施された発掘調査によって発見された倉庫跡（1459年の火災で焼失）と考えられる遺構から出土した遺物です。これらの遺物のうち、平成12年6月27日付けで国の重要文化財（考古資料）として陶磁器518点に金属製品とガラス玉の一括資料がまとめて指定されました。

出土した陶磁器を産地別にみると、中国産を中心に、タイ、ベトナム、日本等で作られた製品が確認されています。これらは、交易によって琉球へ運ばれたものと考えられ、中継貿易で栄えた往時の琉球王国の繁栄ぶりを物語っています。今回の企画展では、この点に注目した展示を行いました。また、陶磁器以外にも金属製品やガラス玉も展示することで、様々な種類の宝物に触れていただきたいと思います。



琉球の対外貿易路と京の内跡出土の陶磁器の流れ

発掘された京の内

◎調査に至る経緯

那覇市首里当歳町に所在する首里城は、グスク時代（中世）～近代にかけて存在した琉球国王の居城です。しかし、昭和20（1945）年の沖縄戦によって多くの建物が破壊されました。その後、終戦後に発足した琉球政府文化財保護委員会を中心として、昭和31（1956）年の園比屋武御嶽をはじめに、戦災で破壊された文化財の復元整備が進められました。

そして、昭和47（1972）年の本土復帰の際、沖縄県が首里城及びその周辺文化財を戦災文化財として、復元整備計画を立案しました。復帰直後には「首里城城郭等復元整備事業」として沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が実施されました。

首里城内郭地区の整備については、昭和59（1984）年度に沖縄県が「首里城公園基本計画」を策定し、正殿などを含む建造物群の復元が検討されました。その後、昭和61（1986）年度に、国営沖縄記念公園首里城地区として整備されることが閣議決定され、平成4（1992）年には正殿を含む建造物群が復元されました。

そのような状況で、首里城内で最も重要な聖域であった「京の内」地区の復元整備が検討されることになり、平成6（1994）年度～平成9（1997）年度までの4か年間、「京の内」地区の復元整備に必要な基礎資料を得る目的で、発掘調査が実施されました。



首里城京の内跡全景

◎発掘調査の概要

4か年間に及ぶ発掘調査の結果、様々な遺構や遺物が見つかりました。遺構は大きく6時期に整理することができます。

第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半頃）：野面石積み。琉球石灰岩を掘り込んだ柱穴と考えられる遺構。

第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）：基壇付建物、区画石積み、土坑。

第Ⅲ期（15世紀中頃）：区画石積み、倉庫跡。

第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）：区画石積み、石敷遺構。

第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）：区画石積み、磚瓦敷遺構。

第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）：首里第一尋常高等学校及び首里第一尋常小学校関連建物遺構、琉球大学関連遺構。



SK01検出状況（北から）



京の内跡出土陶磁器

中でも注目されるのが、第Ⅲ期相当の土坑SK01（倉庫跡）と称される遺構です。この遺構内からは、大量の陶磁器類が出土しました。この陶磁器を詳しく調べると、最も多いのが中国産陶磁器で、他にもタイ産やベトナム産、日本産の製品がみられました。これらは、かつての琉球が中国やタイ、ベトナム、日本などの国々と交易を行った結果、運ばれたものと考えられます。古くは14世紀中頃の製品もありますが、主体は15世紀初頭～中頃の陶磁器です。

当時の琉球は、東アジアの国々と交易を行い、多くの富を築き上げてきたことが、かつて首里城正殿前に掛けられていた万国津梁の鐘（鑄造1458年）に記された「舟楫以て万国の津梁と為し、異産至宝は十方利に充滿せり（船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充滿する）」という一文からも理解することができます。京の内跡倉庫跡から見つかった大量の陶磁器類は、まさに万国津梁の鐘に銘された、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを語る資料と言えます。

また、出土遺物の中には、紅釉水注や元青花八宝文大合子など、世界的にみても希少な製品もありました。これらの資料は、琉球の歴史研究だけでなく、陶磁器研究においても貴重な資料であることがわかりました。

このような重要性に鑑み、平成12年6月27日付けで「首里城京の内跡出土陶磁器」518点及び金属製品とガラス玉の一括資料が国の重要文化財（考古資料）に指定されました。これらは、沖縄県初の国指定重要文化財（考古資料）となりました。

中国のやきもの

京の内跡出土陶磁器の中で最も多いものが中国産の製品で、陶磁器全体の約82%を占めています。これらは浙江省龍泉窯や江西省景德鎮窯といった当時の一大窯業地をはじめ、福建省または広東省など中国南部地域一帯の窯場で生産されたもので、種類は青磁・白磁・青花・色絵・紅釉・瑠璃釉・褐釉陶器などが確認されています。

京の内跡出土の中国産陶磁器は、紅釉水注や元青花八宝文大合子など、世界的にも類例の少ない貴重な資料を含むことで知られていますが、他にも様々な特色があります。例えば器種別にみると、碗や皿などの小型品や盤・水注・酒会壺には日常または宴席で使用した食器のほか、儀礼行為に必要な祭具としての性格が想定され、花瓶や器台は特定の空間を飾る舞台装置としての役割を担ったと思われます。また製品別にみると、同一形態で対になる紅釉水注と瑠璃釉水注は祭祀の場で用いられた可能性が高く、褐釉陶器の壺は酒などを貯蔵した容器であったと考えられます。このように、多種多様な製品が色々な性格を持つ点こそが、京の内跡出土の中国産陶磁器の大きな特徴といえます。



代表的な中国産のやきもの

展示品紹介

中国のやきものには、様々なバリエーションがみられます。ここで、代表的な資料の一部をご紹介します。



青磁 牡丹唐草文花瓶
15世紀前期(明初期)
口径26.7cm 器高62.7cm 底径14.6cm

【青磁：せいじ】

磁器の一種。素地と釉薬の中に含まれる鉄分が、還元焰焼成によって青く発色した磁器。中国の殷周・戦国時代の灰釉陶器がその源流とされ、後漢三国時代の浙江省方面で製作された古越磁が最初の原始的青磁であるとされる。日本や沖縄で出土する青磁の多くは、元代から明代にかけて浙江省の龍泉窯及びその周辺で製作されたものである。

※還元焰 炭素が多く酸素が欠乏している不完全燃焼の焰。酸素に富み完全燃焼の焰を酸化焰という。

【白磁：はくじ】

磁器の一種。白色の素地に透明釉を掛け、高温で焼成した磁器。白磁の起源についてはまだ明確にされていないが、その起源が灰釉陶器や古越磁とされる。原始的な白磁が誕生したのは、6～7世紀の隋から初唐とされる。沖縄で出土する白磁の大部分は、景德鎮窯や中国南部の諸窯及び徳化窯を産地とする。



白磁 玉盞春瓶
15世紀(明初期)
口径6.7cm 器高24.3cm 底径9.1cm

【青花(染付)：せいかくそめつけ】

磁器の一種。いわゆる染付で、中国では一般に青花(青花白瓷・釉裏青)と称する。白磁の素地にコバルトを含む呉須による絵付けを施した後に、透明釉を掛けて焼成する。還元焰焼成により白地に青い文様が浮かび上がる。中国でコバルトの使用は唐時代にみられるが、釉下に絵付けする手法を用いたのは宋時代以降であり、元時代に完成する。青花の主な生産地として景德鎮窯及び周辺諸窯が上げられるが、明・清代には中国南部の各地に粗製の青花を生産する民窯が出現する。また、周辺諸国では中国の影響をうけて、ベトナムでは陳朝末期から、朝鮮では朝鮮時代初期から、日本では江戸時代初期から染付の製作が開始される。

※コバルト 貝類などの天然の鉱物などに含まれる化合物で、青の彩料として用いられる。

※呉須 コバルト化合物を含む天然の鉱物をさす。これを極細末にして水に溶かし、文様を描いた後に上から透明釉を掛けて焼き上げると藍色に発色する。

【合子：ごうし】

蓋のある小型容器の総称。身と蓋を合わせるの意。盒(子)・合とも言う。多くは扁球形で、材質は陶磁器・漆器・金属器などで、用途には香合・化粧品入・薬味入・印肉入などがある。元来は蓋物の身の方を転用したものの。



青花 八宝文大合子
14世紀(元末期)
口径30.4cm 器高18.3cm 底径22.2cm
(蓋)口径30.4cm 器高7.8cm 底径24.7cm
(中蓋)口径29.0cm 器高2.9cm 底径28.2cm
(身)口径28.7cm 器高10.5cm 底径22.2cm



中国産 褐釉陶器壺（大型）
口径 19.8cm 器高 50.8cm 底径 15.7cm

【褐釉：かつゆう】

広義では鉄分を呈色剤として褐色になった陶器も含まれるが、陶磁史からみた場合には、中国漢代に栄えた酸化鉄を呈色剤とする低火度鉛釉のことを指し、その陶器を褐釉陶と称する。沖縄で出土する褐釉陶器は、中国南部の福建省や広東省、タイで生産された12世紀以降の資料である。

【紅釉：こうゆう】

銅を発色剤に使用し高火度で焼成された磁器。銅紅釉・辰砂釉とも呼ばれる。還元焼成のより鮮紅色に発色する。中国では宋代に始まったとされるが遺品は元代が初出である。景德鎮窯が主に宮廷御器を焼造し、明・清代を通じて官窯の特技として製作された。



紅釉水注
14世紀（元末期）
口径 6.7cm 器高 25.7cm 底径 9.6cm



増殖釉水注
14世紀（元末期）
口径 5.8cm 器高 25.4cm 底径 8.6cm

【瑠璃釉：るりゆう】

酸化コバルトを長石に混ぜた着色料を使用した色釉。高火度で焼成すると青く発色する。ほぼ全面に施した場合に称される。主に磁器に用いられることが多い。日本や沖縄で出土する瑠璃釉の多くは景德鎮窯及び中国南部の徳化窯で生産されたものである。

【五彩：ごさい】

中国明朝において完成した上絵付けで、その技術及び製品を指す。高火度釉の白釉陶・白磁を素地に、赤・黄・緑などの明るい上絵具を焼付ける。焼き上げられた絵具は透明で素地が透けて見え、冷たく硬い印象を与える。この技術は、中国金代12世紀後半に華北の磁州窯が始まりで、明代の嘉靖・万暦、また、清朝の康熙官窯などで盛んに焼かれた。日本では赤絵または色絵とも言う。



五彩菊花文碗
15世紀前期（明初期）
口径 11.0cm 器高 5.9cm 底径 4.4cm

日本のやきもの

京の内跡からは日本産の陶器も出土しています。そのほとんどが現在の岡山県に窯跡が集中する備前焼であり、器種には播鉢、甕、壺が確認されています。最も多いのは播鉢で、甕や壺などの大型の製品については、その出土量や出土する遺跡自体も少なく、現在のところ首里城や第一尚氏の菩提寺である天界寺で確認されています。

備前焼については、14世紀末～16世紀初め頃、播鉢を中心に出土例が増えます。特に首里城及び首里城周辺の寺院をはじめとした遺跡での出土が目立ち、その他のグスクやグスク時代集落ではわずかながらの出土となっています。

琉球に備前焼がもたらされた背景には、禅僧が寺院で使った事が考えられる他、茶の湯文化に関わる道具として持ち込まれたとする説があります。しかし、各地のグスクや集落遺跡ではその出土量がわずかであることを踏まえると、王城である首里を中心とした文化的ステイタスを示す道具であった可能性も指摘されています。



代表的な日本産のやきもの

東南アジアのやきもの

東南アジアと琉球の交易も、中国と朝貢関係にある国々との中継貿易により、14世紀後半～16世紀ごろまで、特に15世紀代をピークとして盛んに行われたことが記録に見えます。その痕跡として、京の内跡からもタイやベトナムで焼かれた陶磁器が出土しています。

タイ産陶磁器は中国産に次いで多く、特に黒褐釉陶器の四耳壺が大量に出土しています。壺は大中小のサイズで規格化されており、これらの壺を容器（コンテナ）として酒や穀物、胡椒などの物資を運搬したと考えられます。また、ともに出土する土器製の蓋はハンネラ（半練）とも呼ばれ、四耳壺の蓋として使用されたことが想定でき、この蓋で密封することにより、長い航海にも耐えることができたのでしょう。

一方、ベトナム産陶磁器の出土量は少なく、京の内跡からは青花の瓶と水注などの小型製品が出土していますが、いずれも特殊な形状で数少ないことから、ベトナムと琉球が、何らかの特別な関係にあったことを示しています。



代表的なタイ産・ベトナム産のやきもの

多種多様な金工品

京の内跡からは武器や武具、装身具、祭祀具、生活用具、銭貨など、様々な種類の金工品が出土しています。

武器には刀剣の鐔や切羽があり、武具には兜や甲冑、鎖帷子があります。この中で兜の前立飾は「太陽」の表現とされる大きな円文や三日月文が飾られています。甲冑の八双金具などの鱗のような文様である魚々子は日本製のものに比べるとまばらで、琉球独自の雰囲気を持つのが特徴的です。また鎖帷子は火災の被熱により溶着したものがあります。

装身具では簪や指輪、祭祀具では鏡や香炉、鈴、片口銚子などがあります。香炉には雷文が飾られ、明代の中国でつくられたと考えられています。

この他、工具類や生産・生活関連の用具には釘や鋸、刀子、鍋などの日用品のほか、銭貨が出土しています。錠前や蝶番は、倉庫の扉などに取り付けられ、ここが倉庫跡であった可能性を示しています。



武具 兜鉢の立物
(立物・三鉢形台・鉢形)



上段：刀剣（鐔）、切刃
 中段：八双金物、八双金具の留め金具
 兜立の矧板、兜立の寄壇
 下段：小札、据文金物の菊座、鎖帷子



上・下段左：鏡
 上段右：香炉胴部
 下段右：鼎形香炉把手



上段：長柄付片口鉄子の容器
 下段：花瓶、指輪、鈴



上段：鋸
 下段：銃前、螺番



銭貨

火災の痕跡からみえたもの

土坑SK01の倉庫跡から出土した遺物の多くは、釉薬や素地が変色し、本来の色合いを失っていたり、煤の付着や変形がみられるものもありました。また遺構についても、倉庫の壁と考えられる石積みは、橙色に変色し、脆くなっている石が目立つなどの状況が確認されました。これらのことより、火災による被熱がうかがえます。

首里城では、過去に何度か火災に遭ったことが記録に残されています。土坑SK01の年代的な位置付けが、出土した陶磁器より、主体は15世紀初頭～中頃であることを手掛かりに、当該時期における火災に関する記録を調べると、『明実録』の英宗実録（巻301）に「天順三年三月癸未〔甲申〕（1459年） 禮部奏・琉球国中山王尚泰久奏稱・本国王府失火、延焼倉庫銅銭貨物（礼部の奏では琉球国王尚泰久の奏称により、本国の王府が火災に遭い倉庫の銅銭、貨物なども全部焼けた。）」という記録があります。この記録から、土坑SK01は尚泰久5年（1459年）に焼失した倉庫そのものではないかと考えられています。

このように、遺構や遺物に残る火災の痕跡を手掛かりに、文献史料と遺物の双方からのアプローチにより、土坑SK01の年代が特定されたのです。重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」は、考古資料や火災の年代をおさえられる一括資料としても大変重要です。



被熱の痕跡がみられるガラス玉と白磁碗

重要文化財指定基準

◎ 考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸、銅劍、銅鉞その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡來品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準・(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会告示第2号)[最終改正]平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所有者：沖縄県(沖縄県立埋蔵文化財センター保管)

(庁保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成)

説明文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は霊力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6～7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宫博物院に2点と景德鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が国中に充滿する」(訳文の趣旨)とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鐙等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

(文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋)

※ 官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※ 文化財保護法(昭和25年法律第214号)第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

| | |
|--------------------------|-------|
| 重要文化財 考古資料の部 | |
| 指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 | 518 点 |
| 附 一、金属製品 | 一括 |
| 附 一、ガラス玉 | 一括 |

重要文化財 陶磁器内訳

| 種 類 | 器種：点数 | 器種：点数 | 器種：点数 |
|------------------|-------|-------|-------|
| 青 磁 (289 点) | 碗 103 | 皿 117 | 盤 32 |
| | 壺 20 | 大花瓶 2 | 馬上杯 1 |
| | 水注 3 | 花瓶 5 | 香炉 3 |
| | 水滴 1 | 花盆台 1 | 大鉢 1 |
| 白 磁 (33 点) | 碗 14 | 皿 11 | 杯 2 |
| | 水注 1 | 壺 1 | 瓶 4 |
| 元染付 (2 点) | 馬上杯 1 | 大台子 1 | |
| 明染付 (58 点) | 碗 32 | 皿 4 | 杯 3 |
| | 鉢 1 | 瓶 14 | 壺 4 |
| 色 絵 (3 点) | 碗 2 | 皿 1 | |
| 紅 釉 (1 点) | 水注 1 | | |
| 瑠璃釉 (2 点) | 碗 1 | 瓶 1 | |
| 褐釉磁器 (1 点) | 碗 1 | | |
| 褐釉陶器 (35 点) | 壺 30 | 水注 1 | 鉢 1 |
| | 壺蓋 1 | 特殊壺 1 | |
| | 土蓋 1 | | |
| 白釉陶器 (3 点) | 壺 2 | 水注 1 | |
| タイ産褐釉陶器 (55 点) | 壺 55 | | |
| タイ産半練土器 (22 点) | 蓋 18 | 壺 4 | |
| ベトナム陶器 (3 点) | 瓶 1 | 水注 2 | |
| 備前ほか (本土産) (6 点) | 播鉢 1 | 甕 3 | 壺 2 |
| 瓦質土器 (沖縄産) (5 点) | 蓋 5 | | |
| 合 計 | | 518 点 | |

【引用・参考文献】

- アジア考古学四学会（編） 2013『アジアの考古学 1 陶磁器流通の考古学－日本出土の海外陶磁－』高志書院
- 新垣力 2011『陶磁器からみた琉球の南海貿易－東南アジア産陶磁器・華南三彩を中心に－』第32回日本貿易陶磁研究会（大分大会）資料集 南蛮貿易と陶磁器 日本貿易陶磁研究会・大分市教育委員会
- 池田栄史 2006『沖縄出土の備前焼』『備前市歴史民俗資料館紀要』8（備前歴史フォーラム資料集）
- 池田栄史 2007『沖縄出土の備前焼・補遺』『南島考古』第26号 沖縄考古学会
- 沖縄県教育委員会 1998『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県文化財調査報告書第132集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『特別展企画 首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『平成22年度重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展－首里城ものがたり－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第62集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『平成23年度重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展 東南アジアと琉球』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 亀井明徳（編） 2002『専修大学アジア考古学研究報告書 1 明代前半期陶磁器の研究－首里城京の内 SK01出土品－』専修大学文学部
- 金武正紀 2004『沖縄から出土したタイ・ベトナム陶磁』『シンポジウム 陶磁器が語る交流－九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器』東南アジア考古学会
- 下中直人（編）1991『やきもの辞典』平凡社
- 那覇市立壺屋焼物博物館（編）1998『那覇市立壺屋焼物博物館開館記念特別展 陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会
- 向井互 2008『第3章 海域アジアの貿易陶磁とコンテナ陶磁』『九大アジア叢書 11 モノから見た海域アジア史－モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流～』九州大学出版会

重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

～甦る、異国からの宝物～

発行年月日 平成26(2014)年7月18日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754
URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp/>

印刷 文進印刷株式会社

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14
TEL 098-994-5777 FAX 098-852-3008



沖縄県立埋蔵文化財センター

開所時間：午前9時～午後5時（入所は午後4時30分まで）

休 所：毎週月曜日（月曜日が国民の休日にあたる場合は翌火曜日まで休所）
国民の祝日（文化の日は除く）

〒903-0125

沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7（琉大付属病院横）

TEL 098-835-8751（代表）

交通：◇沖縄自動車道西原ICより車で7分

◇市外線バスターミナル発 那覇バス 97番
「琉大付属病院前」下車徒歩1分